The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	舞踊の稽古における身体的な知の獲得の研究　指導者の語りからの現象学的考察
Author(s)	竹谷, 美佐子
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72464
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（竹谷　美佐子　　）	
論文題名	舞踊の稽古における身体的な知の獲得の研究 指導者の語りからの現象学的考察

論文内容の要旨

本研究の目的は、舞踊の稽古の実践による身体的な知の獲得の経験の構造を現象学的に記述することである。稽古の場での指導者と生徒たちの運動の探求はどのような身体的な知に結びつくのかについて、指導者の稽古での実践の語りから考察する。

舞踊の実践は、これまで教育学や心理臨床の場において応用され、教育や治療の効果の文脈において、拓かれた心身や自己像や身体像の揺らぎを経た心身の統合として考察されてきた。舞踊の運動が何らかの心身の再構成を導くことはこれらの考察から実証されているが、教育や治癒の効果という文脈から逃れ、対象者がそれをどのように経験しているかという経験の構造について考察しようとする際、教育や心理臨床の場への応用の端緒となっている舞踊の稽古の実践に戻って考察することは有効であると考えられる。

本研究では、まず身体的な知に関する先行する議論の整理を第１章でおこなった。身体的な知についての多義性と、特定の場における実践をつうじた考察を整理した後、これまでの研究に欠けているのは身体的知の空間的、時間的な性質という視点であることを指摘した。舞踊論の先行する考察においては、運動の空間性について、それは身体を基盤とした動的な現象であることが指摘されてきたが、欠けていたのは、そうした空間的な知が、指導者や生徒たちの複数の人間で獲得していくという視点であることを指摘した。続く第２章では、舞踊の稽古における運動の経験を考察するために、運動学習についてのこれまでの現象学的な議論を検討した。舞踊の稽古で獲得される運動は、メルロ＝ポンティが指摘した身体図式による身体の統合と他者の行為の模倣による運動とは異なり、自動化された運動として獲得・遂行されるのではなく、むしろ身体への集中を必要とする。このときに手がかりとなるのが、ギャラガーが整理した身体図式と身体イメージの議論である。舞踊の稽古において運動をおこなう際にさまざまなイメージを手がかりにし、運動に先行してイメージを図式化していく。このときの舞踊者の運動経験は、ルグランとラヴンが指摘したように、「身体を知覚経験として捉えながら主体性の経験を導く」ような経験である。舞踊者たちは、運動の際、それぞれの身体が「具体化しない志向的な対象」であり同時に運動の主体として経験する。稽古の場では、こうした経験は、指導者と生徒たちとの言語的・身体的なやりとりにおいて成立している。

第３章では、稽古の場で、主に指導者から投げかけられることばと身体との関係を考察した。メルロ＝ポンティの言語論において、語と身振りは相即している。彼が知覚と身体とのあいだにゲシュタルト的な構造を見出したように言語的世界もまた発話行為の地に支えられて、状況や他者との交流をつうじてその振る舞い方を示す語が図として現われる。何らかの「わざ」を身につける際に指導者がなげかけることばも指導者と生徒との知覚と行為の協働性に支えられている。指導者は生徒たちがおこなう運動を先取りして比喩表現として提示したり、生徒たちが行なった運動についてその差異を示すような発話をおこなっている。稽古の場での言語的なやりとりの場面から、指導者は生徒の身体の統合の一連の過程について把握していると考えられる。このことから本研究では、稽古の場での指導者の経験を扱う。第４章では、本研究の対象者と研究の方法を示し、そしてインタビューの現象学的記述について考察した。本研究では４名の現代の舞踊の舞踊家・指導者に日常的なルーティンとしての稽古での実践についてインタビューをおこなった。インタビューでの語りは、経験の再現であると同時に、稽古の実践の場では語られないような自明なことがらが語られる。インタビューのデータから先行する現象学の議論を手がかりに彼らの稽古での実践の経験構造を記述する。

第５章からは、各指導者の具体的な語りを素材に彼らの稽古の場で実践される身体的な知について記述を行っている。まず第５章では、呼吸による身体イメージの図式化が身体と空間との関係を再構成する経験を扱った。次に第６章では、稽古の場でなげかける習慣的な行為の比喩表現が運動を導く構造について記述した。第７章では、生徒たちが指導者にことばをなげかけてもらいながらであれば運動を行なうことができるが自分たちだけではできないという

場面を扱い、間身体的な同調・同期の構造を考察している。第８章では、解剖学的な身体の知識を元に身体イメージを再構成し運動を行う実践について記述した。ひとは自己の身体について漠然とした身体イメージを持っている。解剖学的な知識とそれを元にした運動で身体イメージを再構成し身体を細かく分節化していくことで運動のあり方を変えていく実践について扱っている。第９章では、運動の際に指導者が何らかのイメージを示すのではなく、これまでの身体の統合を支え習慣として機能している身体図式の働きを利用して運動を行なう場面について考察をおこなった。第１０章では、リリーステクニックをつうじて無自覚にはいっている力を抜く実践を取り上げる。指導者は生徒の無自覚に入っている力を抜くために身体に触れたり体重を預けさせたりする。それにより力が抜ける経験が自己の身体を対象化する契機となっている。無自覚に入っている力が運動の時間に影響していることを指摘し、運動の時間を再構成する試みについて記述した。

最終章では、舞踊の稽古における身体的な知について第５章以降の具体的な経験の記述から、身体・空間・言語・時間のカテゴリーにおいて整理した。心身が拓かれたり自己像や身体像が揺らぐ経験とは、指導者と生徒の複数の人間の間身体的かつ言語的なやりとりをつうじて各々の身体の空間性、時間性、そして言語的世界の再構成の経験として生きることである。舞踊の稽古における身体的な知は、複数の人間との間身体的かつ言語的なやりとりをつうじてそうした経験を自分のものにしていくときに獲得される。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　竹谷　美佐子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	村上　靖彦
	副 査　教授	福岡　まどか
	副 査　教授（関西大学）	村川　治彦

論文審査の結果の要旨

竹谷美佐子氏の学位申請論文『舞踊の稽古における身体的な知の獲得の研究　指導者の語りからの現象学的考察』は、コンテンポラリー・ダンスの指導者4人へのインタビューとその現象学的な分析を中心とした質的研究の論文である。竹谷氏は、みずからのダンスの経験をもとに指導者へのアクティブインタビューを試み、とりわけメルロ＝ポンティの身体論に依拠しつつ丁寧に分析を行っている。

竹谷氏はまず舞踊に関する先行研究および芸の伝達に関する先行研究および現象学・認知科学に関係する文献を100件近くを渉猟する。舞踊論においては尼ヶ崎など、技能の伝達についてはギャラガーやドレイファスによる認知科学あるいは現象学の議論などをはじめとした豊富な文献を検討している。またシーツ＝ジョンストンによる舞踊の現象学、ルグランによる稽古論、生田によるわざ言語の論を土台にそれをさらにメルロ＝ポンティの身体論から拡張するという構想を提示する。そのうえでみずからがとるべき研究方法について細かい吟味をかさね、アクティブインタビューに基づいた現象学的な質的研究という方法を選ぶ理由を説明する。

以上の手続きを経た上で、4人の舞踊指導者の語りの分析を提示する。4人はそれぞれ身体技法の伝達について語ったが、Aさんはイメージを多用し、Bさんは解剖学的な知識と気づきを重視しながら運動の構成を試み、Cさんは身体の意志を介さない自律的な運動、Dさんはリリーステクニックを用いた上での模倣（つまり知覚的な操作）を中心にして稽古をする。同じ舞踊の基本動作の伝達であっても多様な方法があり、竹谷氏はそれを身体図式、組織化、運動感覚、図と地といった側面から詳細に描き分けしている。その結果、身体図式の伝達が、イメージ、触覚、語り、体勢感覚といった要素を介して組織化され、しかもそのプロセスにはイメージ、運動感覚、知覚といった方向からさぐるという多様な可能性があるということを本論文は示した。またこのような解明は、先行研究には存在しなかったものであり、丁寧に個別の語りを解きほぐすことを通してしかできないであろう。

最終的に、竹谷氏は「身体」「空間」「言語」「時間」という切り口から、みずからの分析の成果を整理し本論を終えている。身体的な知の伝達という、そもそも言語化しにくいうえに指導者ごとの個別性の高い実践について、本論はその個別性を保存したまま概念的な構造化を果たし、読者に対してこの「以心伝心」ともいうべき実践がどのような具体的内実を持つものなのかを明確に示すことに成功している。また哲学研究としてもメルロ=ポンティがひらいた身体の現象学をさらに延長する意欲的な試みとなっている。それゆえ、舞踊研究および身体知に関する教育の研究という視点から、本論は高い価値を持つものになっており、博士（人間科学）の授与にふさわしいものであるということができる。